

2024 年度 本郷中学校 第 1 回入試 国語講評

出題形式は同様で大問三問。全体平均は 54.2（昨年 67.5 一昨年 53.0）

【一】 漢字の出題 教育漢字（小学校学習漢字）の読みと書き取り問題

【二】 論理的文章 中村隆文（なかむらたかふみ）『「正しさ」の理由―「なぜそうすべきなのか？」を考えるための倫理学入門』

【三】 文学的文章 如月かずさ（きさらぎかずさ）『給食アンサンブル 2』

【一】

例年通り短文形式 5 題の出題。難易度は昨年度と同等。おおむね高い点数であった特に「潔」や「乳歯」の正答率が高かった。

【二】

臓器移植を話題として、臓器移植への同意を求めるにあたっての問題を倫理学の観点から述べた文章。選択式の設問については高い正答率であった。記述式の設問については部分点以上の得点となった解答は七割ほどであり、設問の満点となった答案も見受けられた。

【三】

中学校の吹奏楽部の部長を務める生徒が周りの部活動の生徒との関わりを通じて心境の変化や、人間的な成長を見せる文章。選択式の問題は概ね高い正答率であったが、問題文の穴埋めの問題や問題文からの抜き出し問題、記述式の問題の正答率が低かった。

過去に実施したものを鑑みて、全体で 7 割以上の得点であった受験生については国語についての学力が充分にあると考えられる。漢字については基本的なものからの出題が多かったが出来はよかった。読解問題については、【三】の方がやや平均点が低くなった。【三】の記述式の設問については全体の最後の問題であり、なおかつ解答に求める字数も多かったからか、全般的に苦戦しているようだった。高得点者も一定数出るような差がつくテストになった。国語の学力が高い受験生は一定数いたのではなかろうか。答案の字も概ね丁寧で、記述式以外の答案は空欄のままのものは少なく、意欲的な印象を受けた。

2024 年度 本郷中学校 第 1 回入試 算数講評

<講評>

■問題の難易度（昨年同回比）：

昨年同回と同レベルの試験であった。大問2の小問集合においては、定番問題であると我々が予想した問題の出来栄は想定通りであったが、(4)など印象と異なる結果の問題がいくつかあった。全体的に見て、選抜試験としては十分機能した。

■（第1回）の受験者の算数学力：

受験者のレベルは、算数に関しては、昨年の第1回の受験生と比較して、全体としては同等かやや計算力が弱い。

■「受験生の解答から見られる特徴」と「今後の対策」：

- ☐ 立体の問題などパターン問題から少しでもずれた出題となると、得点率が急落していた。
- ☐ 大問5は手を付ける時間が少ないようである。（時間切れ？作戦？）

■実力差が顕著になった問題（正答率が4割～6割の問題）は以下の通りであった。

- ・ 大問2(2)：本校における定番出題である小問であった。塾などで何度も練習した問題であると考えられる。こういった問題を正確に得点することが重要であろう。
- ・ 大問3(2)：こちらも本校における定番出題であるグラフの問題の2問目。
(1)の結果を踏まえる形で解答していくもの。
- ・ 大問5(1)：最終問題のも勝負の別れどころであったようだ。テーマ的には立方体の切断面の問題であり、定番問題ではあろう。類題を経験していた受験生は有利であったと思う。ただ、(2)以降は図にかき込みをしていくと見づらくなって、問題が解きにくくなったのではないかな。

→「実力差が顕著になった問題」は特に注意して練習しておく
(過去問で類題をピックアップして確認しておく)とよい。

以上

2024 年度 本郷中学校 第 1 回入試 社会講評

■全体

地理で地形図の読図があるなど、出題傾向は例年通り。難易度も例年並み。なかなか本文を熟読する時間的・精神的余裕は無いかもしれないが、入試を終えてからぜひゆっくり読み直してほしい。歴史では国家による人民把握手段の歴史を、公民では統計数字や理論・公式だけに依拠しない“人間的な”経済学の在り方を、それぞれ述べている。受験生諸君がこれらを読み、現在の政治経済の在り様を冷静に、時に批判的に見つめて考察してもらえたらと考えている。

■地理

日常生活の中でさまざまな様式の地図に触れる機会はとても多い。高校課程で「地理総合」が必修科目となり、一般教養としての地理学が再評価されている中、本校では従来「地図に親しむ」ことを重視し、地形図の読図に関する問題を出題してきた。代表的な地図記号や等高線の特徴など、地理院地図の基本的な読み方は早めに習得しておきたい。そして中学入学段階においては、国内の地誌に関する基本事項が確実に身につけていることが望ましい。

今回の地形図は、三角州の典型とも言える雲出川（くもずがわ）の河口部が描かれた「1：50000 松阪」の図幅を使用した。読図が中心の間1～間4までの正答率は極めて高く、受験生の地形図対策は万全であった。一方で、図幅の地域を含む三重県を中心とした東海～近畿エリアで、統計数値からその特徴を判読し府県名を特定していく間8では、②の愛知県を除くと、漢字の表記も含めて解答に苦慮した様子がうかがえた。さらに、都市間の位置関係を問われた間7は、思いのほか難問となったが、地理的分野全体の正答率は約6割で、ほぼ狙い通りの結果となった。

■歴史

今回は、いくつもの懸念が指摘されているマイナンバーカードに保険証などを一元化することになった事態を踏まえ、議論や情報漏洩などへの対策が不十分なまま突破してしまう権力のあり方に、小さいながらも警鐘を鳴らすことを意図したテーマを設定した。また、例年と同様に、①時代や世紀の大まかなイメージが作れているか（間1・間8など）、②歴史的事実をしっかりと把握できているか（間5・間6・間7・間9など）、③大まかでも時系列に並べられるか（間2や間3）、④似て非なるものを区別できているか（間4・間13など）、などを意識しつつ作問した。いずれにせよ、例えば、「古墳時代といえば前方後円墳」といった単純な理解から即答するのではなく、丁寧に選択肢を検討する、学習した内容を比較・検討して用語を絞り込む、といった分析・思考が必要であろう。また、学習する際には年表で確認する、正確に漢字で書く習慣をつけておくことをお勧めする。

■公民

闘う経済学者「宇沢弘文」の生涯と業績をテーマにした出題。公民科では、確立した学問に基づいた内容を学び、確かな知識と思考のフレームワークを中高生に身に付けえもらいたいと考えている。そして「スマートであれ！紳士であれ！」というスローガンを実現する、高い倫理観を持った社会人の輩出を目指している。その教育のねらいをストレートに反映した出題である。

基本事項を覚えて問題をよく読めば正解できる問題がほとんどであり、過去問を解いていれば簡単に正解できる問題も出題している。高い正答率となり、採点をしていても多くの受験生がしっかり対策をしてきたことが伝わってきた。

正答率が低かったのは間9。本文を読んで得た情報と持っている知識をもとに答えを推測することが求められる問題であるが、このような問いに答える思考力は、変化が激しい社会で活躍するために、大いに役に立つであろう。慣れればそれほど難しくないとは出題側は考えているので、過去問を解いて、できるようにしておいてほしい。

2024 年度 本郷中学校 第 1 回入試 理科講評

例年通り、物理・化学・生物・地学の 4 分野からほぼ均等に出题した（設問数 46 問 昨年 39 問）。設問数は昨年度よりも増えているが、第 1 回入試ということで、標準的な出題を心掛けている。

受験者平均点が 41.0 点（正答率 55%）であり、ほぼ例年並みと考えられた。大問②③あたりを慎重に時間を掛けて解く必要があったのか、大問④の問題文や写真をしっかりと読み込むことに時間を割けなかったと思われる答案が多かった。どの分野に対しても、基本的な知識は十分に学習していることがわかる一方で、計算や考え方等において、もう一步の答案も多く目についた印象である。

	今年度				昨年度		
	分野	内容	配点	設問	内容	配点	設問
①	物理	温度と熱の伝わり方	18	12 問	温度と熱の伝わり方	19	11 問 (記述 1 題)
②	化学	水素の存在・性質・利用・発生量	19	11 問 (記述 1 題・ 計算 5 題)	アルミニウムの性質・酸化	19	6 問 (計算 4 題)
③	生物	ヒトと動物の血液循環	19	15 問 (計算 1 題)	光合成の働き・植物の植生	19	10 問 (データ読取 2 題)
④	地学	地形・地質・地層	19	8 問 (記述 1 題・ データ読取 1 題)	天文・惑星食	18	12 問 (データ読取 9 題)

①物理 温度と熱の伝わり方に関する問題【質量や密度の解釈・現象の予測と理解】13.5 点／18 点（75%）
物質を構成している分子の数や運動と、物質の温度や熱との関係を説明した文章を読み、それに関連する実験の結果を予測したり、考察を行ったりする出題。水に氷が浮いている状態に対する質量と密度の基本的な設問に始まり、氷は空気中に放置するよりも、周囲に水があった方が融けやすいという実験結果を熱のやり取りと関連づけて考察させる設問であった。最後に、熱湯に触れるとやけどをするが、サウナ風呂に入ってもやけどをしない理由を、熱の伝わりやすさから説明できるかどうかを問うた。水に浮かんだ氷が融けた時に全体の重さは変わらないこと、水面の高さが変わらないこと、氷が水に浮かぶことのできる理由などについてはもっと高い正答率を見込みたい出題であった。その一方で、分子の運動と熱の伝わり方については、多くの受験生が正しく誘導に乗って考えられていたと思われる。

②化学 水素の存在・性質・利用・発生量に関する問題【身の周りの化学・量的関係】10.1 点／19 点（53%）
水素を題材にして、性質や発生法などを問う基本的な出題や、水素利用を例として燃料電池、ロケットエンジンを出題した。さらに、アルミニウムとマグネシウムに塩酸を作用させて水素を発生させたときの量的関係をグラフを用いて考えさせる計算問題を出題した。1.7 kg が正解であるところを 3.3 kg とする答案が目立った。正解は 5 kg から 3.3 kg を差し引いて 1.7 kg を解答する必要があった。生活の中で燃料電池の名称はよく知られるようになったようであるが、「然」「量」「科」などの漢字間違いが目立った。

③生物 ヒトと動物の血液循環に関する問題【体のつくりと仕組み】10.5 点／19 点（55%）
心臓を中心としたヒトの血液循環の図を見て、各血管の名称や流れている血液に関する基本的な出題、および、魚類と両生類の血液循環についての並び替え問題。さらに、成人では睡眠中に血液が全身を何回循環するかを計算する問題や、肺胞のつくりに関する出題であった。ヒトの心臓のつくりおよび血液の循環については高い理解がなされていたが、メダカやカエルの心臓のつくりについては苦戦した受験生が多かった。また、血液の循環回数を計算する問題は、複数の計算を経て正解に至る必要があるために、桁数の間違いを含めたあと一步の答案が目立った。

④地学 糸魚川ジオパークの地形・地質・地層に関する問題【説明文と写真の読解】7.0 点／19 点（37%）
昨年の第 3 回入試に引き続き、糸魚川－静岡構造線（フォッサマグナ）の見学記録を読んで、周辺に観察される特徴的な地形に関する説明文を読み進めていく出題。リード文や写真を手掛かりに、地質学における基本的な用語を用いての解答、密度測定による鉱物推定を問うた。さらに「衝撃痕」「ポットホール」「根なし山」に関する考察が出題された。全体として知識だけではなく、しっかりと情報を読み取ったり、地形的な特徴を理解したりできるかを試す出題であったが、それらを十分に行うことができず、(5)以降で正解できなかった受験生が多かったのが印象的であった。